2019.7.30

大草

読書メモ

111.梅原猛「人類哲学へ」NTT出版（2013.10）

112.講演：井上直巳「気候変動リスクと人類の持続可能性」（2019.6）

**＜梅原猛「人類哲学へ」から＞**

　この本の読書メモは、2018.9.23付でレポートしたが、もう少し詳しく読書メモを作成した。梅原氏は、人類哲学の序章を語り始めたところで2019.1.12、93歳でご逝去された。

・「人類哲学」（本当に人類の立場に立った哲学）は、今までなかった。今までの哲学は、現代の人類のあり方や未来のあり方を考えるのに不完全であったとの疑問がある。

・原子力発電の事故は、現代文明が招いた文明災害である。脱原発は、世界文明の必然的な潮流となるであろう。

・自然エネルギーには、「地熱、水力、火力、風力、太陽光」の五つがある。空海は、すべての自然及び人間の肉体は、「地大、水大、火大、風大、空大」の五大からできているとした。空大を太陽光と考えると、全自然エネルギーは、空海のいう五大と一致している。

・現代の哲学は、デカルトに代表される合理主義哲学とニーチェやハイデガーに代表される実存哲学からなっているといえるが、それを見直す時期に来ている。新しい哲学が以下の理由により、必要と考える。

①近代文明の暗黒面：原子力の戦争利用と平和利用の両方とも行き詰まっている。

②合理主義哲学（代表はデカルト）の本質は、「死の哲学」（生命を殺すことを否定しない哲学）であり、生命を殺すことを罪悪とする思想がない。生きている自然世界を破壊し、死の世界へ導いていくのではないか。

③ハイデカーの哲学も「死の哲学」である。ハイデガーは、原子力の平和利用も戦争利用も否定し、世界は滅亡の時代を歩んでいると指摘した。そして、人間は「現存在」であるが、日常的には自己を失って頽落している。しかし、人間は、死の前に立たされたときに本来の人間に目覚め、実存となるという。

・日本文化の基層には、縄文文化がある。また、「草木国土悉皆成仏」の思想が日本仏教に共通する思想になっているのではないか。

・西洋文明は、自然と人間社会の両方を搾取する上に成り立った文明であるという（安田喜憲）。

・森から高周波が出ていて、それが人間の脳幹に大きな影響を与え、脳内のセロトニンやドーパミンといった神経伝達物質の分泌に大きな影響を与えているのではないか（大橋力「音と文明」岩波書店2003）。

・ホモ・サピエンスだけが、外界を象徴化とか表象化できる能力を持つことができた。その理由は不明。

・外界や投影の仕方が違えば、（外界が投影してつくられる）内部モデルも異なる。森の中に住んでいる人間と砂漠に住んでいる人間では、インパクトの受け方が違うのではないか。そして、その外界を投影する際のルールの違いも重要。二元論と要素還元主義というルールに基づいて外界を投影するーーーこうして作られる内部モデルは、ルールを共有する人の間ではわかる、わからないの議論が可能である。EX．宗教ならそれを信じている人の間では共同の内部モデルができ、議論できる。

・大脳皮質の中のニューロンがネットワーク化するという能力は、言語能力に関係すると考えられている。ホモ・サピエンスが20万年前に誕生したとき、表象できる大脳皮質を持っていた。それが一つの出発点となるというのは、わからないでもない。

・古代エジプトで、死体を守っているのがカー（霊）であり、あの世へ行く魂のことをバーといい、自分たちの思想に矛盾の無いように組み立てた論理をイデアと呼んでいた。そして、すべてのものにイデアがあることになり、神秘の匂いがする。すなわち、動物、植物、山にも川にも命があるという思想に繋がっていく。これは、古代エジプト人が考えていたことである。

・（梅原）日本文明は植物を中心に世界を考える文明である。人間を中心に世界を考える西欧文明とは異なる。時間も繰り返す時間すなわち春夏秋冬という季節の繰り返しである。そして季節感をいちばん知らせるものが植物である。その植物を中心に考えるところに日本の世界観がある。

（西洋と日本の違いの例：トランプと花札。トランプから花札ができたというが、トランプは王の世界。キング、クイーン、ジャックと一種の宗教的なものといえる。一方、花札は全て季節。一月は松、二月は梅というように季節であり、動物が配置されている。）

・産業革命までは地球システムの中に自然の駆動力があったが、人間圏は、産業革命によりその内部に「駆動力」を持った。そして、人間圏の「駆動力」が右肩上がりに拡大して地球システムの「駆動力」を超える時代を迎えており、人間圏を地球システムとの調和ができない状態に入りつつある。

・この代表例が、福島原発の事故である。人間圏の「駆動力」が地球システムの「駆動力」を破壊する恐れがある。このままいくのか修正するのか、「文明の岐路」にある。原発は、一万年経っても元に戻らないものを残したが、同じようなことを繰り返すのかどうか、文明の本質的な問題が問われている。（（大草コメント：昔、チェルノブイリ原発が事故を起こしたとき、ロシアだからそんな事故が起きたとして、自分のこととして捉えなかった日本が同じことを起こした。原発事故は他人事ではなかった。欧米もこのことを我がこととして取り上げねばならない。））

・核分裂と核融合は、太陽エネルギー源で、太陽や星の内部で起きていることであり、地球システムの「駆動力」の中にはなかったパワーである。とんでもない技術である。

・右肩上がりの人間圏の「駆動力」を許すことは、エネルギーが増加する一方となり、地球温暖化を超えて、地球金星化（高温化）に繋がりかねない。従って、文明のあり方、文明の形を変えていかなければならないのである。

・梅原は、「自分は預言者の一人で、そのうち人類哲学の始祖が出てくる。世界中からいろんな思想が出てこなくてはならない」という。

・日本仏教の各派に共通の思想は、草木国土悉皆成仏である。人類の原始的文化は、狩猟採集ではないか。狩猟採集の考え方は、アニミズムであり、すべてが神であるという考え方である。

・大きな文明の行き詰まりの中で、もう一回人類文明の最初の原始的な文明にまでさかのぼって考えなくてはならない時期に来ている。

・ニーチェもハイデカーも「ソクラテス以前の哲学者に帰る（べき）」といってヨーロッパ哲学の思想的伝統を批判した。ソクラテス以前とは、イオニアの自然哲学。タレス、ヘラクレイトス、アナクサゴラスなどの自然哲学のことである。

・宗教は、多神教から一神教へと移って行った。それに伴って、一神教が科学を生んだともいえる。

・西洋哲学は、デカルトに代表される科学により、自然を支配できるという考え方をとり、科学を発展させてきた。その科学は、無機的な生命のない世界を発展させたが、生命が自然からも人間からも失われた世界を生みだした。

・ニーチェは、人間の理性の万能を否定した。

・ハイデカーは、理性の哲学は実は意思の哲学である、意思と理性は同じものと考えた。ハイデカーは、「存在者の存在」が忘れられているといった。

・実存哲学は、キルケゴールとニーチェを祖として、ハイデガー、ヤスパースをその継承者とする哲学である。

・ニーチェは、意志の哲学、永劫回帰の哲学を説いた。

・ハイデガーは、「存在と時間」で時間は瞬間性のもので、その瞬間の中に自分の運命を引き受ける「実存」であるという。個人の運命、共同体の運命のうち、共同体の運命に目覚めよといった。ハイデカーは、ナチスを肯定する演説をして痛烈に批判を浴びた。ただし、ハイデカーにはユダヤ民族を排斥する意図はなかった。

・ハイデカーの思想は、第二次世界戦争中に変わった。ニーチェ研究の中で、当初はニーチェの意思の哲学と永劫回帰の思想を肯定したが、結局1940年頃に、ヨーロッパの形而上学、哲学の伝統はダメだと否定した。

・ハイデガーは、ヘルダーリンやリルケのことを書いている。存在する全体が意思であるとする考えに対して、隠れている存在が語りかけている、その存在の声を聞けという。例えば、森の中では、そうした声がささやかれている。その声を聞けという。

・イオニアの自然科学者、とくにパルメニデスとかは、その声（自然の声）を聞いたという。ところが、プラトンによりその声（真理）を聞くことが閉じられた。それは、プラトンが、存在そのものを本質と考えたことによる。そのプラトンの延長線上に、デカルト、ヘーゲルもいる。

・梅原は、「存在」とは自然だと考える。ハイデカーのいう存在に帰れとは、自然に帰れということである。ただ、ギリシャとドイツにしか自然の声が聞こえないとするハイデカーの考えはおかしいという。19世紀の天才、大哲学者はニーチェであり、20世紀はハイデカーであるという。しかし、将来の人類のあり方を考えると、それらも積極的思想になっていないという。

・梅原は、若いころにトインビーと対談をした。西洋諸国が科学技術文明により、世界を支配した。科学技術文明を採用しない非西洋国家は植民地となったが、日本は科学技術文明を積極的に取り入れ、そうならなかった。トインビーは、日本文明を八大文明（シュメール、エジプト、中国、インド、ギリシャ・ローマ、アンデス、日本、西欧の８つ）の一つに挙げている。そして、20C以降は、非西洋文明が科学技術文明を取り入れながら、自己の伝統を生かして新しい文明を作る時代だといった。梅原は、トインビーにどんな原理でそれを考えるべきか問うたが、トインビーの回答は「それはお前が考えろ。まだ若いのだから、一生考えて行け」と叱られたという。ハンチントンにも同様のことを言われたという。

＜新しい哲学を語るために、梅原の考えたこと＞

①一神教的なもの、そこから派生した科学主義的な原理には行き詰まりがあるとすれば、少し遡って文明を考えることにより、別の原理を捜してみよう。（思考の枠組みを変えてみようということ）

②どの時代でもメインの枠組みとは別に、傍流や底流として別のものがあった。それを再評価する。

③人類の持続的な存続を可能にするような科学技術文明のあり方は、どういうものか。

④自然征服の科学から自然共存の科学へ変えることが必要である。

⑤自然は恐ろしいものであると共に、富を与えてくれる慈悲深いものである。この矛盾した自然観をどう考えるのか、そういう思想を取り戻さないと人類の存続はあり得ない。

（これが、梅原の考える人類哲学の基本原理である）

⑥梅原は、ヨーロッパの思想はどこかで行き詰っており、それを克服する原理が日本の思想の中に有ると思うようになった。それは単なる日本の思想ではない。人類の原始的な思想に帰って文明がどう変わったのか、文明の持つプラス面とマイナス面をよく斟酌して、新しい哲学を語るべきという。梅原は、86歳になってようやく人類哲学の序説を語れるようになったという。

⑦日本思想の中の中心思想は、「草木国土悉皆成仏」である。これは、天台本覚思想（天台顕教+天台真言密教）である。

梅原猛氏は、2919年1月12日にご逝去。合掌。

梅原の語り始めた人類哲学の序章から終章まで誰かが受け継ぎ完成させなければ、、、

**＜講演：井上直巳「気候変動リスクと人類の持続可能性」から＞**

この講演は、大和市図書館主催で行われたもの。講師は、環境省の職員であるが、上智大学地球環境学研究所に出向中。各所で、地球環境の激変リスクと人類の持続可能性についての講演をし、啓発活動を実施中。

・世界平均気温は、産業革命時から、0.85℃上昇した。今夏フランスで44℃を記録した。

・気温の上昇で、農業が壊滅し、食糧難となると予測されている。

・農耕のお蔭で地球人口70億人となっている。

・地球平均気温が4℃上がり農業がダメになり、地球人口が1万人となるリスクがある。

・現在、気候変動で人類絶滅期へ突入する岐路にある。

・人類のCO2排出が引き金となり、極地方の氷が解けて氷の中のCO2が排出。

→温暖化でグリーンランドの氷も解け、緑の大地となると太陽光線を吸収し、ヒーターとなる。→シベリヤの永久凍土も解けて、CO2やメタンガスを放出→山火事でCO2が排出。森、海、山、川などでCO2が増加。→アオコの発生、海のバクテリアの増殖などで魚などの生物が死滅。⇛ドミノ倒しで温暖化が進む。

・ホットハウスアースとなり、地球平均気温が4～5℃上昇する。→海面が10m～60m上昇。食糧難。人類絶滅の危機。

・2070年までに、CO2排出を減少させないと、危険な状態となる。

・経済と環境の両立はあり得ない現実。森林や海など自然を守っていかないと人類は生き残れない！！

・チョコレート、アイスクリームなどの消費が森林破壊に繋がっていることへの理解が必要。（パームヤシから油脂をとるため、パームヤシの森林を破壊している）

・一人一人にできることは、たくさんある。環境破壊の実体を知り、周りに伝え、事業者・政治家にも要望するなどの活動を推進中。今、地球規模で対処すれば、なんとか間に合う瀬戸際に我々はいることを認識し、行動しなければならない。

・スエーデン人のクレタ・トゥーンベリという15歳の少女の活動。少数の金持ちのために地球上の生物の生きる権利が犠牲になっている。将来の自分たちの身の安全を確保するために立ち上がった少女の活動。スエーデン議会前での座り込みなど。

（大草：コメント）

以上の環境破壊に対する危機的状況は、梅原猛の説いた人類哲学の必要性を現実に示している。人類に残された時間は少ないことを認識しなければならない。

以上